



菩提樹

佛さまに育てられる年輪

第12号 平成26年4月発行



編集・発行

正法寺

山口市江崎2710

TEL

083-989-2213

FAX

083-989-5339

「この如来、^{みじんせかい}微塵世界にみちみちたまへり」

—お慈悲の真ただ中に生かされて—

親鸞聖人『唯信鈔文意』より



5月 永代経法要



7月 つくりあがり法座お斎

正法寺第十七世任職真教院釈正彦師を偲んで...



正法寺住職 眞城 眞信

昨年、11月16日は、正法寺第十七世住職真教院釈正彦師、俗名眞城正彦師の50回忌の御命日でありました。御門徒の皆様にもご縁を結んでいただきたく、例年の定例法座と併せて、50回忌法座をお勤めさせていただきました。御講師には、17世住職正彦師の御実家である防府市右田の乗圓寺の御住職がお越しくださいました。現在の乗圓寺の御住職は、17世住職正彦師のお兄様のお孫さんにあたられます。お父様やお爺様からお聞かせいただいたという17世住職正彦師の思い出話を交えながら、大変ありがたいお取り次ぎを賜ったことでした。

17世住職正彦師と17世坊守文子様とは、従妹の關係にありました。文子坊守が2歳の時、住職を継職するはずの父親が38歳という若さで急死します。その二年後に祖父である16世住職も往生し、正法寺は、その後、約15年間にわたり、住職が不在の状態が続いたのでした。その間の幼い文子坊守とその母親である16世坊守の御苦勞は、想像するに余りあります。当時の御門徒の方々も、正法寺の行く末を大変心配されたとに違いありません。正法寺から防府市の乗圓寺へ嫁いでいた叔母の力添えもあり、まだ幼かった文子

坊守は、その叔母の次男であった正彦師と許嫁となり、文子坊守が女学校を卒業し19歳を迎えた時にお二人は結婚されたのです。昭和10年に、正法寺へ入寺され第17世住職を継職された正彦師は、その翌々年の昭和12年4月に嘉川幼稚園を開園されています。現在、正法寺には、嘉川保育園と大内光輪保育園の二ヶ園の保育園が運営され、約300名の子ども達が、毎日、阿弥陀如来のお心に接しています。また、これまでに400名近い子ども達が、浄土真宗のみ教えの中で仏の子どもとして育ち、巣立っていききました。その一番の基礎を築かれたのが、第17世住職の正彦師でした。また、正彦師の事績として忘れてはならないのが、昭和31

年に火災によって焼失した正法寺本堂の再建です。約15年間の無住職時代を経て、御門徒の期待を一身に背負って住職に就任した正彦師にとって、火災によって山門を残すお寺全てを焼失させてしまったことは、痛恨の極みであったことが想像されます。しかし、社会全体が貧しかった時代状況にも関わらず、わずか三年後の昭和34年に本堂は再建されたのです。これは、御門徒方の力もさることながら、その先頭に立つ住職正彦師の人柄と、お寺とみ教えに対する深い味わいがあったことでしょう。その後、正彦師は、昭和38年までに庫裏一棟の再建と本堂内陣の仏具、打敷を整え、翌年の昭和39年に56歳で御往生されました。後に残された者は、先だつた方の生涯を無駄にするような生き方をしては決してなりません。その方の生涯を胸に刻み、大切にみ教えを聞かせていただくことが、私達にできる何よりもの用いとなるのです。歴代住職の50回忌をお迎えたことは、正法寺にとって、大きな節目にもなります。これまでの正法寺の歩みを大切に受け止め、これからも丁寧な教えを聞かせていただきますように。



法語

正法寺 十七世住職 正彦 謹白

人生は苦しみの海なり、涙の谷なり、咲く花にも散るときあり、満てる月にも欠くるときあり、生ある者に死あり、楽ある者にも苦あり、会う者は別れ、盛んなる者は又衰うるは人生の常相なり。苦しみの海に漂える者よ、涙の谷に沈める者よ、唯み仏を念ぜよ、しからはよく教わる、ことを得ん。よし現世の波荒く、人生の谷深くとも、逆巻く波の上にも、岩間の草の露の上にも、月は真の影を採取して捨て給わざらん。我等の苦しみはこれによつて抜かれ、我等の涙はこれに依つてぬぐわれ、—我等の心の闇はこれによつて破らるゝなり。

前々住職様の思い出

◎自転車のご縁

厚東・渡辺禮二

私の家は厚東、国道2号の側です。昭和23年ごろ、庭先に出ていましたら知らない方が来られ、自転車の空気入れを貸してほしいと。少々ちゅうちよしていたら父がやってきまして、正法寺のご院主さまであることがわかり、大変驚いたことでした。

ご院主さまは、嘉川から厚東の棚井の浄念寺様においてのお帰りであったようです。今の国道が整備されるまでは、道幅は狭く、今坂の峠を越えるあたり上り勾配で難渋する道でした。

自転車で大変なご苦労であったことがしのばれます。これがご縁で心にかけていただくようになりました。ありがとうございます。



◎幼稚園入園

高根中・田中安子

私は6歳の時、祖父母の家に養女に来ました。さみしいので毎日泣いてばかりでしたが、祖母は仏様の前に座らせて、いつもおことわりを言って拝ませていました。一年あまりたった時、嘉川の公会堂に嘉川幼稚園ができて、ご住職のおすすめで入園しました。園長先生のやさしさ、文子先生のオルガンで「われらは仏の子どもなり」の歌を教えてくださいました。こと、うれしい思い出です。

主人との結婚式も、お内仏様の前で仏前結婚式をあげていただいたことが心に残ります。正彦ご住職、文子坊守様のおかげで、今もお聴聞のありがとうございます。喜んでお参りしています。

◎盆の踊り

空川・山本國男

お寺の会合で念仏踊りの話が出て、盆に踊りをしてはどうかということになり、17世住職と地区世話人が相談されたのでしよう、本堂で踊りの練習が始まりました。踊りが本物になると、昭和23年ごろには、正法寺で盛大な踊りがあることが近郷に知られ、方々から踊りに参加され近郷でも有名になりました。後には仮装行列などの競演も催され、お寺全体が活気にあふれていました。

◎「守る」について

高根下・今本英子

「私がお寺を焼失したことは、一生の苦しみです。……これからはしっかりお寺を守っていかねければと必死の思いです」と、ご決意を吐露された時のお顔が忘れられません。守るって、大変だなあと思ったことでした。昭和38年8月のことでした。そして翌年、お志半ばでお浄土へ還られました。

「守る」ということは、ご寺族様もさることながら、門徒も力を合わせてお守りしていくことではないでしょうか。法座でよくお会いしていた先達の方が、「よう参ったね。お寺を盛りあげんやあね」とよくおっしゃっていました。

正彦住職様と同じ心で、先達の方々と同じ心で、私は私なりの力でお役にたてればと思っております。

◎注編集部

昭和31年12月10日 本堂庫裡焼失
昭和32年1月 仏教婦人会の発願で托鉢行脚を決定
「恩徳讃」を称えつつ、防寒具一切を着けず、美祿厚東・徳山・鹿野まで浄財集めの行脚。
昭和32年4月 一日一円貯金や、チヨ米運動を始める。
昭和35年5月21日 本堂完工式
きわめて短期間に、現在の本堂が建立できたことは、ご住職ご寺族をはじめ、ご門徒の皆様のお念仏に寄せる熱い思いが伝わってきます。

◎スカウト活動

玄珍・一門徒

昭和23年ごろ、正法寺でボーイスカウト、ガールスカウトが発足。小学校の運動場でのキャンプファイヤーで、「遠い日」の歌を歌ったときの感動、本堂に宿泊したことなど、なつかしい思い出で、正彦住職様のスカウト制服姿が今も目に浮かんできます。





◎コボちゃんのお父様

前寺内・石田(棟久)和代

昭和37年、中学2年の時、腹膜炎をおこして入院、手術。少し入院が長びいたある日、前々住職様がシュークリームをたくさんもってお見舞に来てくださったのです。私にとっては、幼なじみで同級生だったコボ(厚坊)ちゃんのお父様。突然のことでもちよっとびっくりしましたが、大変うれしかったし、そのシュークリームのおいしかったこと。なつかしい、なつかしい思い出です。

◎最後のお正月

前寺内・村田昌子

正彦ご住職と私の父(村田潔)は、同じ防府市生まれであり、ともに嘉川に居住したご縁で仲良しでした。

毎年正月三日には我家で四、五人の小祝宴が開かれていました。しかし、ある年末父が体調をくずして、お正月の祝宴を開くべきか迷っていた時がありました。そこへ正彦ご住職が来られ、「あなたの体調が悪くても、後のことは心配するな。お子さんの面倒はみるからお正月の定例行事は開くべきだ」といわれ、毎年の通り開いたところ、父は元氣を取り戻し、93歳まで生きました。ありがたい励ましのお言葉でした。

あるお正月、宴たけなわの時、坊守様からお電話があり、私を取り次ぐとしばらく問答された後、ご法務なので帰られることに。お帰りの時の残念そうなお顔は今も忘れることができません。その時が最後のお正月だったと思われまます。お寺様の仕事は待たないかと、肝に銘じた日もありました。あの日から50年の歳月があつという間に過ぎ去りました。感無量の思いです。

◎前々住職さまを偲んで

前寺内西・上田千代子

昨年十一月に、前々住職さまの五十回忌法要が勤修され参拝の御縁にあわさせていただきました。

顧みると、私が息子を連れてはじめてお参りしたのが、前々住職様にとっては最後の初参式でした。あれから間もなく、山口日赤病院に入院なされたことを記憶しています。十一月にご往生なされ、深い悲しみの中の御縁でした。又ありがたい佛縁でございました。

この度五十回忌と聞き、息子も早や五十才になったな……と思い感無量な想いで一杯です。これからは私なりに開法生活にいそしみたいと思います。

◎俱会一処

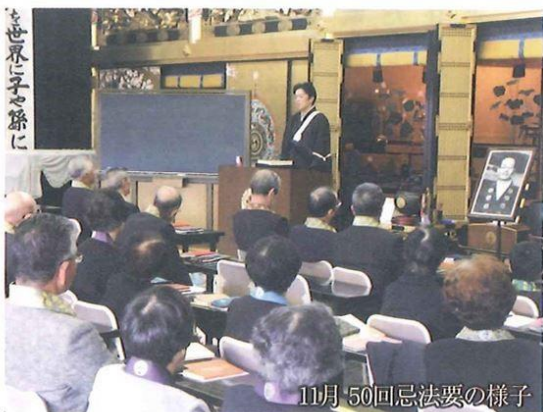
前寺内・末廣洋子

この話は亡き主人から聞いた、50年前の前の前々住職と主人の仏縁の話です。

それは住職様と主人がそれぞれ病氣治療入院の為に、山口行き宇部行きの間屋バス停でバスを待っていた時、ご住職様が主人に言われたそうです。「おいサムちゃん、お互いに上り下りの病院に行くが、必ず元氣になって又会おう！必ず会えるからな、ええか。」と目をじっと見て念を押すように話されたそうです。父親がいない主人にとって「ええか」の

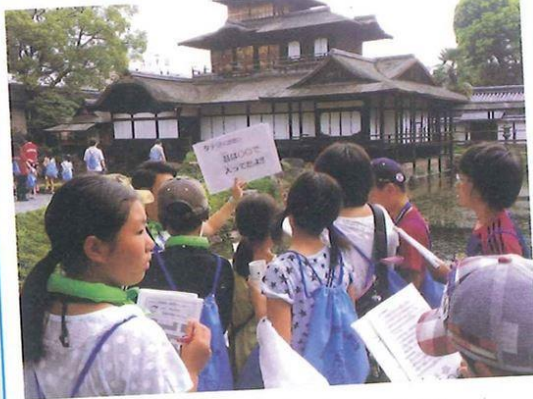
一言は力強く安心して乗車したそうです。それから半年後ご住職様はご往生され、主人にはとても悲しいお別れだったようです。

住職様と主人が最後に交わした「必ず遇おう」は、心配するな、仏になって必ずお浄土で遇える世界があるという住職様のご教化だったのです。阿弥陀如来のご誓願を信じ、またお浄土で遇えることを思うと、ただただ「ありがとうでございます」と俱会一処の喜びにお念仏申させて頂いています。安心して生きることを伝え導いてくださったご住職様にお礼を申し上げ、私もまたお浄土でお二人に遇えることを楽しみにしています。



11月 50回忌法要の様子

世界に子と孫に



四年 藤岡恭平

ぼくは7月に、京都の西本願寺に行きました。西本願寺はぼくのかよっているお寺よりも大きくて金ピカの所がものすごく大きかったです。その大きい本願寺をみんなでおきそうじしました。とても大きいのでふくのもとても大変でした。時間もかかったけどきれいになりました。「やっぱりそうじをするときれいになるな。」と思いました。本願寺はとてもおもしろかったです。



四年 末広匠太郎

僕は夏休みに京都にある本願寺にしんかんせんにとつていった。次の日、早い時間におまわりをしてそれから庭の草取りをした。そしておかみそりといって一番えらい人がぼくの頭にカミソリを置いて法名をもらった。法名は「釈宝徳」です。ぼくのお父さんは「釈顯英」です。法名のいみはわからないが、いまから考えていきたい。映画村が楽しかったです。またいきたいです。

大きかった本願寺

— 児童念仏奉仕団に参加して —
平成二十五年七月三十、三十一日



六年 渡辺 純也

7月30日、31日に、念仏奉仕団で京都へ行きました。西本願寺はとても大きな建物だなーと思いました。ぼくたちは草とりとぞうきんがけの奉仕をしました。夜、部屋のまくらなげがとても楽しかったです。京都タワーと映画村も楽しかったです。



五年 岩城 智大

行く前は、とてもきんちょうしていましたが、初めて会った人とも仲良くなれてよかったです。西本願寺に行くのは初めてで、どんな所なのかとても楽しみでした。行ってみるととても広くておどろきました。本願寺では、おつとめをしたり、そうじをしたり、おかみそりをしていただいたりしました。旅館の夜や映画村の観光もとても楽しかったです。来年も参加したいです。

ご門徒から広がるお念仏の輪

◆家庭法座

高見 伊藤達子

四年前、仏婦会長を辞めた年、「何かしたい」と強い思いが起こり、「家庭法座」を毎月第四水曜日、十時より、行うこととしました。

なかなかお寺へお参りできない主人を、お法りにあわせたいという思いも、法座を開いた理由です。

近所の方々を誘って、約十人くらいの集まりです。

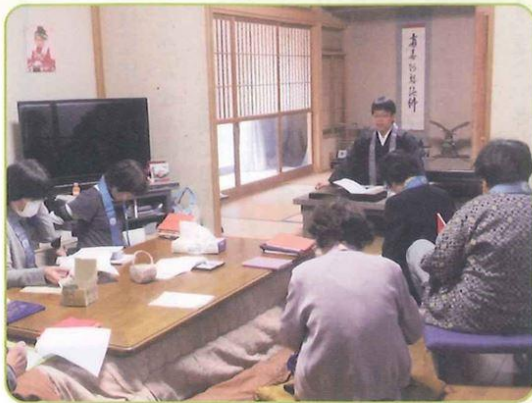
御院家様のおつとめ、そのあと、歎異抄の法座です。

毎回、御院家様の法座は、吸いこまれるようで、皆御院家様ファンとなつてきました。

歎異抄を通して、親鸞様の教えが、一つ一つ私たちの心の中に、響いてきます。

法話が終ったあと、手作りおやつで楽しくすごしています。

月一回のお法りの会は、いつか我家の伝統となり、子供たちにお法りを伝えていきたいと願っています。



◆お取り越し報恩講

今井 金光けいこ

私がお嫁に来て、お取り越しと言え、お寺様が来られる時を待ち、お勤めをして帰られる。それだけが、お取り越し報恩講だった。

自宅で家庭法座をしていた時、お参りしていた方々との雑談で、お取り越しもみんなが集ってできないものか?ということとなり、できる家を回ってしていただこうと、ということになったのが三年前です。

今井二班のすべてのご門徒のお参りとはいきませんが、都合でお参りできませんので、ご仏前を持って来られる方もあり、うちはずーっとやってないのでという方も.....。

地域で集い、一緒にお勤めをし、ご法話を聴聞させていただくご縁を大切に、年一度でなく、また家庭法座を復活して、雑談から仏法へと、何でも話せるブツダサロンができればいいかな?と思っています。



早朝に響く梵鐘

梵鐘とともに

— 宮本啓一さんの朝

毎日朝六時、正法寺の梵鐘の音が響きます。撞(つ)いてくださるのは、高根上の宮本啓一さん。

宮本さんは、退職された五、六年前から、毎朝ついておられます。(それまでは、今はお浄土に還られた山門前の棟久歌子さんがついておられました。)



宮本さんは、「以前は、父が長いこと

つかせてもらっていた。父がお浄土に還ってからは、私が思っていたが、仕事の都合でできなかった。

退職してから、住職さんをお願いして毎日つかせてもらっています。鐘を

つくると本当にすがすがしい気持ちになります。時には、近くの方や通り

すがりの方が梵鐘のまわりに来られて、ありがたいことだと言われる

のを聞くと、これからも続けなければと思っています」と話しておられます。

親から子へと受け継がれた梵鐘のご縁

宮本さんのお父様も、長い間、

正法寺の朝六時の梵鐘を撞いてくださっていました。それは、宮本

さんの4歳になる娘さんが、不慮の交通事故で亡くなられたことが

ご縁だったそうです。戦争で右腕を失っておられた宮本さんのお父様は、

お孫さんを失った悲しみをご縁に、お寺の鐘を毎朝、左手一本で響かせて

くださっていたのです。その様子は、当時、毎日新聞に大きな記事となり掲載されました。

お寺の梵鐘は、お誘いの鐘です。「お願いだからお寺にお参りし、私の心を聞き取っておくれ」と如来様が呼んで下さるのが、梵鐘です。親子二代で、如来様のお手伝いをされるとは、本当に尊いことです。

真弓よ安らかに…

毎朝「交通安全」の鐘

お寺の孫のめい福を祈り

寺族あるばむ



新発意が、国語の授業で「素敵なお名前」を作りました。嘉川の文化祭にも出展!! 「すばり、なもあみだぶつ」が大好評でした。



4月からピカピカの一年生になります。木蓮の木の前で大好きな猫とツーショット!!



ケーブルテレビに出演しました。将来の夢は「坊主さん」!! 意味が通じないテレビ局の人に「御院家さんのお手伝いをする女の人」と上手に説明ができました。



妙好人『因幡の源左(げんざ)さん』①

鳥取県の浜村温泉に近い気多郡山根村という山合いの小さな村に、妙好人と慕われた源左という方がいらっしやいました。本名は、足利喜三郎といいますが、一般には通称の源左衛門、略して源左さんと呼ばれていました。源左さんは、根っからのお百姓で、文字は読むことも書くこともできなかったそうです。天保十三年四月に生まれ、昭和五年二月二十日に八十九歳という高齢で御往生されています。

源左さんが、仏教を本気で聞くようになったのは、十八歳の時に父親がコレラでなくなったことが大きな機縁となったといわれています。わずか半日の思いだったそうですが、コレラ特有の激しい下痢と嘔吐の連続で、全身をけいれんさせながら苦痛にのた打ち回るような最後だったようです。しかし、その激しい苦痛の中で、源左さんの父親は、死の直前、血を吐くような思いで、我が子源左さんに遺言を残されたのです。その遺言というのが、「おらが死んで淋しげりや、親をさがして親にすがれ」というものでした。貧しい農家において、父親を亡くすというのは、大変厳しい人生の始まりでもありました。また、苦しみながら死んでいった父親の姿を目の当たりにして、

死のおそろしさと闇をのぞくような不気味な死の不安が、ひたひたと源左さんの心に迫ってきたことでしょうか。そんな中で、父親の謎のような遺言が、源左さんの人生を導いていくことになるのでした。

源左さんの開法の姿勢は、まさに命がけといえるものでした。お手次ぎの願正寺の御住職から、父親が言った親というのは、阿弥陀如来さまのことであり、親にすがれと言ったのは、その阿弥陀如来さまに出会い、阿弥陀如来さまと相談しながら生き死んでいくことだと教えられても、簡単には納得できなかったそうです。それは、理屈は分かっても、目の当たりに仏さまを味わえないというところがあつたようです。時には、京都のご本山まで上がり、当時、学徳兼備の高僧として名高かつた原口針水和尚に一週間つきっきりでお聴聞をされたこともあつたそうですが、それでも如来様のお心が頂けず、虚しく帰ってきたといえます。そんな毎日が、十数年続きます。み教えを聞かせていただくというのは、良いところだけを聞いて、ぱっと分かるというような安直なものではないことが、源左さんの開法の姿勢からよく分かります。

しかし、そんな源左さんにも、本当の如来様を目の当たりに味わえるような時が訪れます。それは、三十歳を過ぎたある夏の日、牛と共に草刈りに出かけた帰りのことでした。刈った草を束ねて、それを背中に背負って帰りはじめた源左さんでしたが、急にお腹がしめつけられるように痛くなったそうです。しばらく、休みながら我慢して歩いていましたが、どうしても我慢できなくなり、「でん牛よ、すまんけどな、これも持つてくれ」と、自分が背負っていた草の束を牛の背中に乗せました。すると、体がすーっと軽くなり、軽くなると同時に、お腹の痛みも楽になっていきます。その瞬間、源左さんの心に、如来様のお心が響いたのでした。自分の人生、自分が背負っていくしかないのだからと気張っていたけれども、その私の生も死も全てを背負ってくださる方がいたことに、初めて心が開かれていくのを感じた。それは、源左さんが、阿弥陀如来に遇った瞬間でした。源左さんは、この時のことを「ふいと、わからなくても、らつたいな」と後々まで語っておられたそうです。この時から、源左さんには、悲しいことも、つらいことも、当たり前前々のことでも「ようこそようこそ。なんなんだ、なんなんだ」と有難いこととして受け入れていく、阿弥陀如来に導かれて育てられる人生が開かれていくのでした。

来月号に続く...

ご案内

正法寺仏教婦人会 90周年記念大会

平成26年 11月8日(土)

講師:不死川 昌史 師
姜 暁 艶 先生(二胡演奏)
「お法に遇う大切な一日に!!」

編集後記

この度は、昨年の秋に勤められた前々住職様の50回忌法要に係ることを中心に編集しました。

東日本大震災から3年経過しましたが、これからも早期復興の為に、力を合わせていきましょう。

如来様のお働きの中で生かされていることを喜び、念仏生活を送りましょう。

編集委員

- 久保 實
- 藏岡 美恵子
- 泉 専六
- 徳田 亀代子
- 金光 雄一
- 高井 邦子

正法寺ホームページ <http://www.shouhouji.com/>

「山口市正法寺」で検索して下さい。

毎月更新しています。過去の菩提樹もすべて閲覧できます。